

川の本

1994 夏の号



No. 37





河庄の壺かづぼ

むかし、むかし、伊豆にある河津川が 今よりずっと ぶかかったころ
なかでも、栖足寺のうらもんあたりは、ひとときわ ぶかい淵になっていて、
そこに たいへんいたずらな カッパがすんでおりました。

「川へ行くときは きをつけて、カッパに足をひっぱられるぞ」

「川ぞこから、手をのぼして、こどもの尻子玉をひきぬくぞうだ」

そんなうわさが だんだん大きくなって、田んぼに水をひく せき がこわれ
たときも、畑のきゅうりが、あらされたときも、なんでも わるいことがおこ
ると、村の人たちは、ぜんぶカッパのせいだと思ふようになりました。

「あのカッパさえいなければ、河津の村ほどういところはないう」
と村の人たちは話しあっておりました。

ある年の夏、お堂だけだった栖足寺を、りっぱな寺にたてかえることになり
村の人たちも みんなあつまって、てつだっておりました。

大きな木を馬にひかせてはこぶ人、その木をけずる人、みんな、汗びっしょり
になってはたらきました。

空が夕やけにそまるころ、その日のしごとがおわります。

「やれやれ、きょうもぶじに しごとがすんでよかった、さあ、汗をおとしに
川へ行こうや」

そういって、じぶんの馬をひきつれた村の人たちは、ぞろぞろと河原へやって
きて、水浴びをはじめました。

河津川の水は、夏でもつめたくて、人も馬も とてもきもちよさそうです。
そのときでした。とつぜん「ヒーン、ヒーン」と一頭の馬がとびあがっ

て、きゅうにあばれだしました。

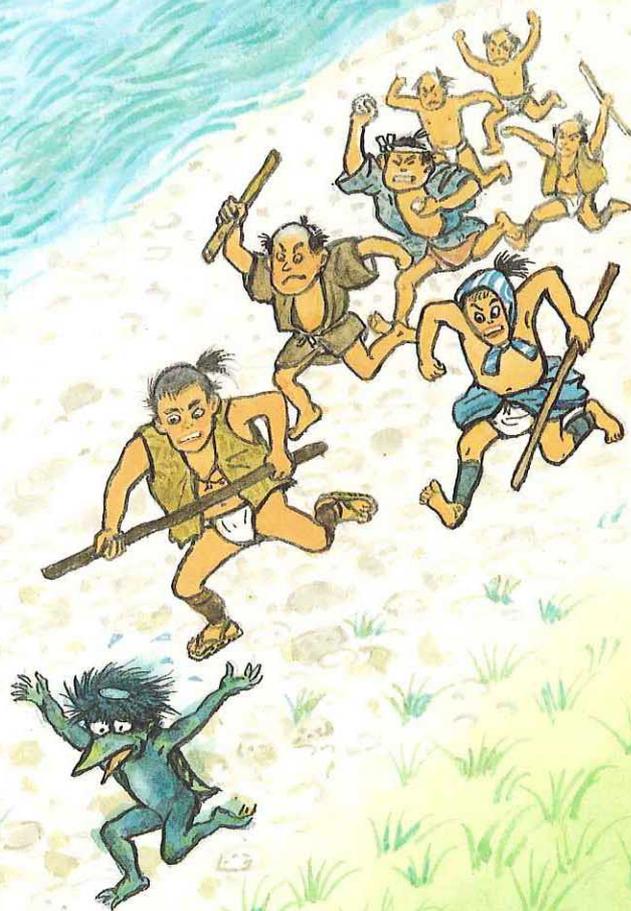
まわりの人たちがびくりにして馬のほうをみると、その馬のしっぽに くらい
へんなものが しがみついています。

「ややや、みろや、ありや、カッパじゃないか」

「ほんとだ、カッパだ カッパだ」

「いたずらカッパにちがいない、にがすな、やつつけろ」

みんなは、ぼうや石ころをもつて、カッパをめがけて走りだしました。



おどろいたのはカッパです、あわてて川へとびこもうとしましたが、馬に
ふりとばされて、川とは ほんたいのほうに なげだされてしまいました。

水の中では、つよいカッパも、りくのうえでは じんげんにはかいません。
「ヒューイ、ヒューイ」となきけなく さけびながら、ひっしになって につ
まわっています。

「まてえ、ぶつころしてやる」そんな声まできこえます。

「ヒューイ、ヒューイ」やつとのことで、カッパは栖足寺のうらまで につ
てきました。そこはいきどまりでした、もうにげばがありません。

カッパはしかたなく、そこにあつたいどにドボンと とびこみました。

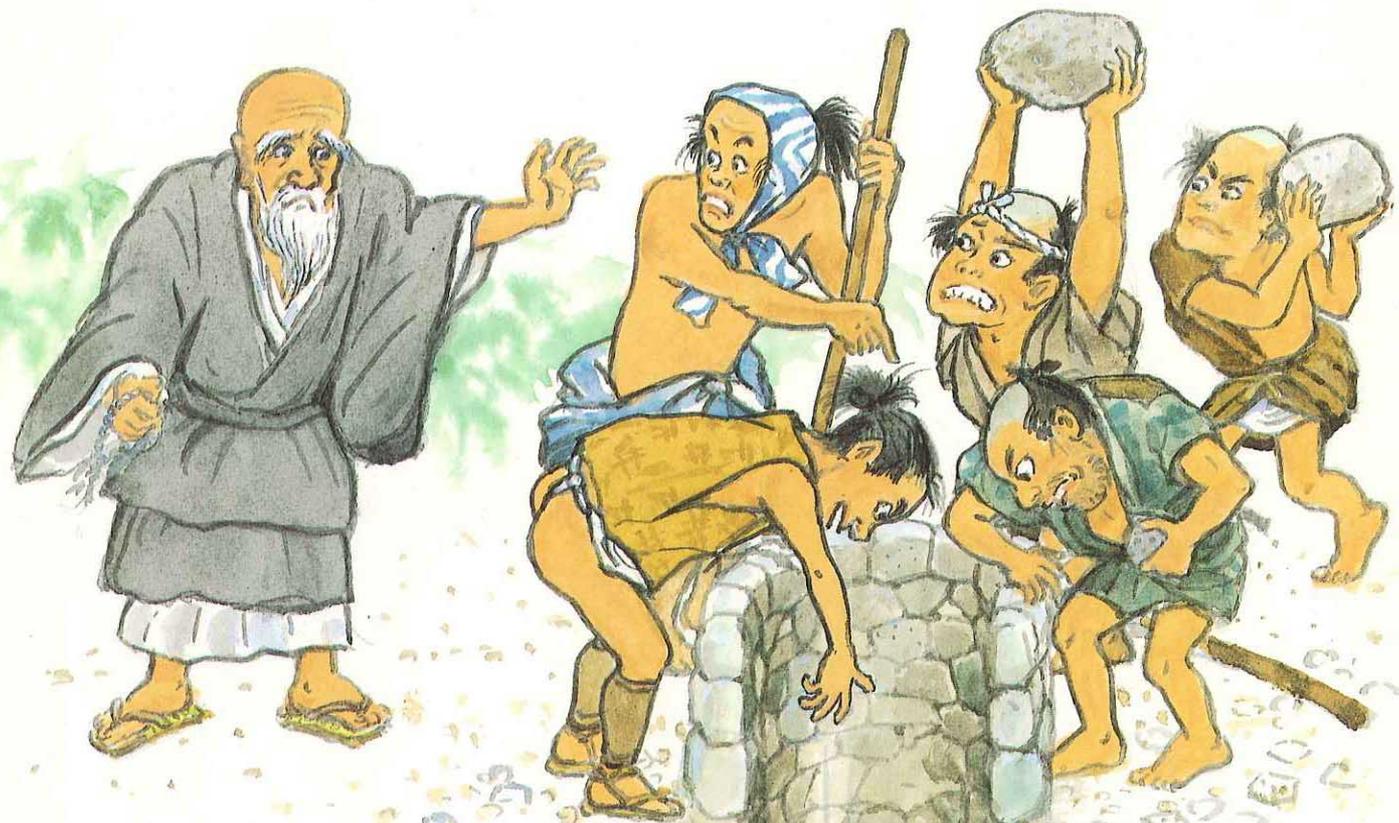
「やつ、カッパめ、いどにとびこんだぞ」

「ばかなやつだ、もうにげられねえ、大きな石をぶちこんで、おしつぶしてや
るわ」

いどをとりかこんだ人たちは大さわぎです。

そこへ、さわぎをききつけたおしょうさんが寺から でてきました。
「これこれ、みんな、おちつきなされ、今は寺をたてる だいじなときじゃ、
たとえ わるいカッパでも、いきものをころすことはゆるしませんぞ。
どうじゃ、ここはひとつ、この おしょうに まかせなさい」

そんなけいしている おしょうさんに そういわれては しかたがありません。
みんなは すこすこ かえっていききました。



おしよさんは、カッパを いどから だしてやりました。
カッパは、まだぶるぶる ふるえながら ふあんそうに おしよさんを見
あげています。

「これ、カッパ、おまえは たいそういたずら者のようじゃな、いたずらも、
度をすぎると、じぶんのせいではないことまで、おまえのつみにされるのじゃ、
ここには、また だれかにつかかって、ひどいめに あわされるじゃろう、
どこかへ行って、ここをいれかえるがよい。これからは けっして いたず
らなんか、するでないぞ」
そういつて、カッパをにがしてやりました。

その夜のことで、おしよさんのねているへやのあまどを、
とんとん、とんとん、と たたくものがあります。

「このよふけに、だれじゃ」

おしよさんが、あまどをあけてみると、たすけてやったカッパが にわさき
に ぼつんとすわっております。

カッパは、ぺこりとおじぎをして、

「おしよさま、さつきは あぶないところをたすけてくださって ありがと
うございました、これは おれいのしるしです」

といいながら、くろっぼいつぼを さしだしました。

おしよさんが手にとってみると、つぼは からっぽでした。

「おしよさま、このつぼは、ものを入れるつぼではありません。音をきく
つぼです」

と あわててカッパは、いいました。

「ほう、どんな音がきこえるのかの」

おしよさんは、つぼのくちに そつと耳をあててみました。

するとどうでしょう 中から、なんともいえないほど きもちのよい水音が

さらさら さらさら さらさら……と、きこえてきます。



それは、せせらぎの音でした、すきとおるような水のひびきでした。
 「ほほう、……これは、なんとも……ここちのよい音じゃのう」
 おしろうさんは、うっとりとして、その音にききいりました。
 そのようすを見たカッパは、きちんと すわりなおすと、あらたまった声で
 「おしろうさまにいわれたとおり、わたしはここをいれかえ、これからと
 おくへまいります。もう二どと お目にかかることはありませんが、ときどき
 このつばに耳をあてて、わたしを思い出してください。そして、つばから水の
 音がきこえるうちは、どこかで、わたしは元気にして、このお寺を守りつ
 づけていると思ってください。……ではどうぞ、おたっしやで」
 といつて、ぺこりとおじぎをすると、とことこ と くらやみの中へ たちさ
 っていきました。
 それからというものの、カッパは二どと あらわれませんでした。
 しかし、つばに耳をあてると、いつでも、
 さらに、さらさら……と、うつくしい水の音がきこえてきました。
 この音は河津川のせせらぎの音とそっくりでした。
 そして、この音をきいた人は、だれでも、この中まで あらわれて、
 やさしい、おだやかなきもちに なったのです。
 ……だから……河津の人は、いい人ばかりなんだとき。



ほんとにあった河童のつばと河津川

さて、このお話のカッパのつばも、カッパがとびこんだ いども、たずねてみたら、ほんとうにありました。
 そして、お話の河津川も、伊豆半島の天城山中から、美しい溪流となって今も元気に流れていました。
 川は、河津七滝などの渓谷をぬけて平地にかけおりてきますが、その目のまえには雄大な相模湾が広がっています。
 日本の川の特徴である、短くて、勾配が急な姿を、よくあらわした川といえるでしょう。昭和33年、伊豆地方を狩野川台風がおそった時、狩野川とおなじ天城に水源地をもつ河津川も大氾濫をおこしました。
 現在、V字型の谷あいから、いきなり海にそそぎでる河津川のすがたを見ると、この川全体が一本の滝のようになって、下流の村むらをおそったすがたを容易に想像することができます。
 「それまで深かった川が、その時おし流されてきた土砂で、浅くなってしまう」と聞きました。
 しかし、ふだんは、せせらぎの音がたえない、やさしい川です。
 そして「カッパのつば」の話は、この川から生まれました。
 この話では、河津川と河津の人たちとの、深い結びつきを感じる事が、できると思います。
 いたずらカッパのせいで、安心して川にちかづけないことは、村びとたちにとっては、なにより困ることでした。
 人びとは、水あそびをするだけでなく、田んぼの水も生活の水もこの川からもらいました。水辺は子供たちにとって最高の遊び場でした。また、美しいせせらぎの音は、人びとの心に大きなやすらぎを与えてくれたのです。
 やっぱり河津川は心のふるさとでした。
 河津の人たちにとっては、そんな川からはなれてくらすことなど考えられないことだったのでしょう。
 この河津川は川端康成の「伊豆の踊り子」の舞台にもなった所としても有名で、今では河津温泉郷として、多くの人が訪れています。
 この下流ちかくの谷津に栖足寺がありました。
 古い歴史をもつ寺で、現在のご住職は32代目だそうです。
 ひっそりとした本堂にすわっていると、カッパ君が、どこからかこっそりと、のぞいているような気がしてきます。
 そこで、寺の宝としてつたわる、カッパのつばを見せていただきました。
 「そつと耳をあてて、聞いてごらんさい」
 そういわれて、おそるおそる耳をあてると、ほんとうに聞こえたのです。
 さらにさらさら……
 すっかり、おだやかな気持ちになって寺をでると、河津川も、さらさらとこちよく流れておりました。

上流の魚

山おくて、わきだした
つめたくなって、きれいな水は
谷間にあつまり、はしやぎながら
岩のあいだを、われさきにと、流れます。
こんな川を溪流とよび
ここにすむ魚は溪流魚とよばれている。
なかでも釣り人のところを熱くする
ヤマメ、アマゴ、イワナ、は、
溪流魚の3大スターだ。



イワナ [サケ科] 全長18~35cm
漢字では、岩魚とかく。岩だらけの源流あたり、
水温ももっともひくいところにすむ。
エサのすくない上流にすむため、くいしんぼう
で、虫だけでなく、カエルなどもたべる。

ヤマメ [サケ科] 全長12~30cm
漢字でかくと山女魚。いかにも溪流の主らしい
名まえだ。用心ぶかいから、人かげをみつけると
岩かげにサッとにげこみ、何時間もでてこない。
天然のヤマメはまぼろしの魚といわれるほどだ。

アマゴは
ヤマメに、せつくりだが
月同様に赤い、はんてんがある

アマゴ [サケ科] 全長12~30cm
漢字で天魚とかく(アメノウオの別のよび名だそう)。
山にふった雨が溪流になるように、
アマゴも雨の生まれかわりに思えたのだろうか……
性質はヤマメにそっくりで神経質だが、くいしんぼう
なので、ヤマメより釣りやすいそうだ。

ボクはね
ほんとはとても
おいしいのだ

カジカ [カジカ科] 全長7~15cm
肉食性でくいしんぼう。すがたは、
グロテスクだが、きれいずき。
きれいな水ぞこの小石近くがすみか。
食べられるが釣り人にはあてにされない。

イシドジョウ [ドジョウ科] 全長6~8cm
きれいな水ぞこの小石の多い場所にすむ。

アブラハヤ [コイ科] 全長5~15cm
溪流でも流れのゆるやかなところにすむ。
カジカとおなじく、釣り人はみむきもしない。

上流の川には、このほかに、アメマスなどサケ科の回遊性の魚などが、ある期間
すむ。他にも魚ではないが、かわいいサワガニなどは、一生、上流にすむ。
岩場の溪流は、危険もおおいから気をつけよう。清流をよごさないマナーも大切だ。
切れた釣り糸など、ぜったいにすてないでほしい。

親子でチャレンジ川くだり

水しぶきをあびて、荒瀬をのりこえ、ゆったり淵を流れる。スリル満点の川くだりにチャレンジしてみよう。きつと今まではちがった川のすがたが見えてくるはずだ。

スリルまんてん、イカダくだり
山おくから、材木をはこぶため
考えだされたのがイカダだ。
和歌山県の北山川には
観光用のイカダくだりがある。
ライフジャケットをつけ
下半身びしょぬれになって
荒瀬をのりきると
川つてスゴイときげびたくなるぞ。

ななりのへんせい
七両編成
になっいて
20人のりた

コワクほんか
ないぞオ

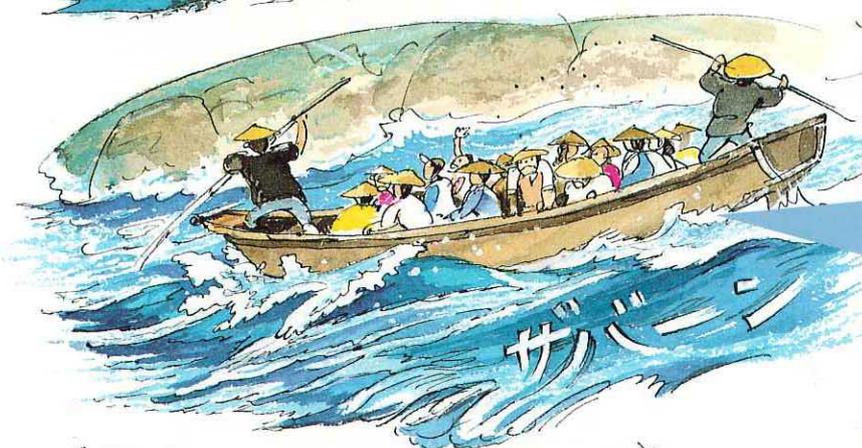
びしょぬれだよ



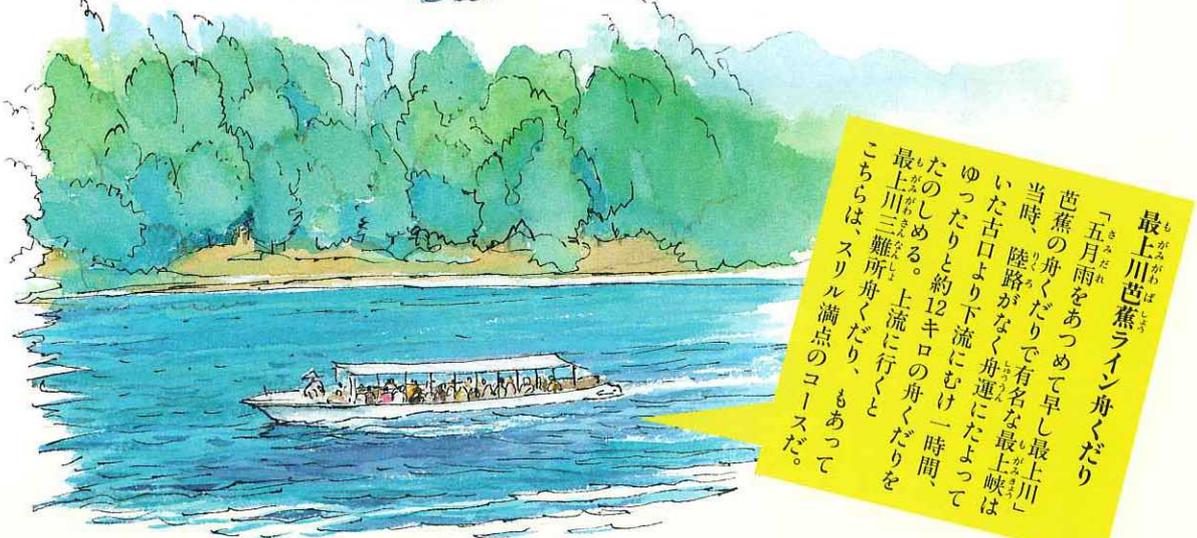
木曾川の、日本ラインくだり
その美濃太田〜犬山の約13キロが
選ばれたうつくしい急流。
木曾川の水になったつもりで景色を
たのしみ、スリルを味わう舟くだり。



「天竜くだれば、しぶきもぬれる」と
唄にもうたわれた、ごうかいな舟く
だり、「船頭さん、がんばってえ」
とおもわずさけんでしまう。
このほか、天竜ラインくだりもあつ
て、こちらはゆったりと美しい渓谷
をたのしめる。



最上川芭蕉ライン舟くだり
「五月雨をあつめて早し最上川」
芭蕉の舟くだりで有名な最上川
当時、陸路がなく舟運にたよつて
いた古口より下流にむけ一時間、
ゆつたりと約12キロの舟くだりを
たのしめる。上流に行くとき
最上川三難所舟くだり、もあつて
こちらは、スリル満点のコースだ。



むかしから人びとは、この急流をじょうずに利用して材木をはこんだり、舟で物を
はこんだりしてきた。
現在ある観光用の舟くだりは、その名残がおおい。むかしの人になったつもりで舟
くだりをするのも楽しいものだよ。

カヌーで清流をたのしむ

清流だけがカヌーの世界ではない。ゆったりした川くだりもカヌーのみりよくのの一つだ。カヌーの講習会などがあればチャレンジしてみよう。子供や女性でも楽しめるよ。



折りたためるカヌー ファルトボート



川の伝統行事

御船祭り

御船祭は、和歌山県新宮市の熊野速玉大社の例祭として毎年十月十六日新宮川をぶたいにおこなわれる神事です。赤い丹塗りに金銅の金具でかざられた美しい神幸船に、みこしがのせられ、九隻の諸手船にひかれて新宮川をさかのぼり御船島をまわり御旅所へ行く。速玉大神の鎮座を再演しているともいわれる行事です。このあと行われる諸手船九隻のきょうそうは、この祭りのクライマックスです。

のぼりをたてたそれぞれの船には、十人のこぎてがのり、合図とともにいっせいにスタートする早船きょうそうは勇壮です。この御船祭は和歌山県指定無形文化財となっています。



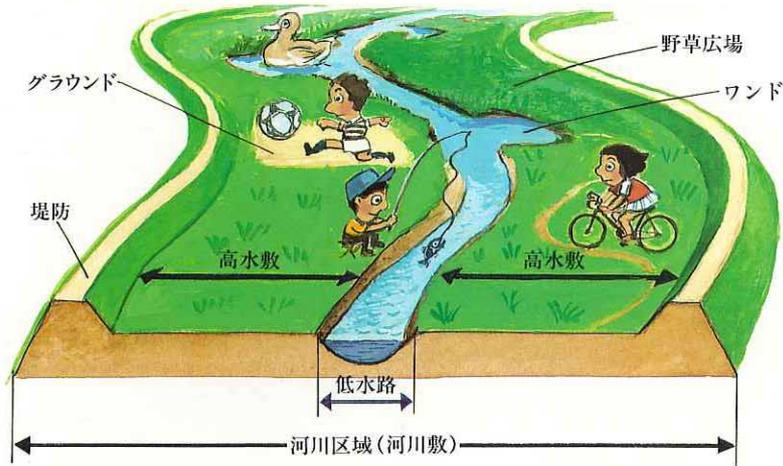
LOVE RIVER



川へ行くときの注意

でかけるときは、行先を家のひとにつけておく。なるべく、おとなの人と行く。
ともだちどうしで行くときは、3人いじょうさそいあわせる。川の流れをよくかんさつして、深そうなところや流れのはげしいところなど危険なところがわかったら、ともだちにおしえてあげよう。
雨のあとなど、川が増水しているときは行かない。危険をしめす掲示板などがあるところはさける。
あきかんやごみをすてないように。
もっていったものはかならず、もちかえろう。

か せん く い き か せん し き こう す い し き て い す い ろ
 河川区域(河川敷)と高水敷・低水路 ってなんのこと?



上の絵を見ればよくわかりますが、

- 河川区域とは、一般にいわれている河川敷のことで、堤防もふくめた川市全体のことをいいます。
- 低水路とは、ふだん 川の水が流れているところのことです。
- 高水敷は河原といわれていますが、大雨で川の水が増えた時に、その水を安全に流すための、大切な川の敷地です。

また 河川区域にふくまれる土地は、鳥や草花など自然にとっても大切なところですから、なるべく自然のすがたを守るのが理想です。

しかし、都市部では、人びとの いこいの広場 として自然公園になっていたりスポーツをたのしむ みんなの広場 になっているところもあります。

このような場所は、緊急時の避難場所に指定されているところもあります。

河川愛護月間

7月1日→31日

8月1日は水の日です

河川環境管理財団は

みんなに愛される川であるように、こんな仕事をしています。

- * よりよい水辺のプランニング
- * 楽しく安全に遊べる川づくり
- * 川をきれいに、川を愛する心を育ぐくむ運動
- * 未来の水辺を考えた調査や研究
- * せせらぎ・ふれあい基金

●この本は再生紙を使用しています。

監修 建設省河川局

財団法人 河川環境管理財団

Foundation of River & Watershed Environment Management

(〒104) 東京都中央区入船1丁目9番12号

TEL. (03) 3297-2600 (代表)